

れる云、某なくては國中何とも難治。我に愛子あり是を以て人質とすべし。外に手代三人質とし出すべし。是非とも其身をゆるし、國中の治るやうに致し吳と云。彌兵衛聞譯て愛子を請取、並三人の手代も請取、扱せねれるを許してあげたり。扱出船して日本へ歸り、財物等は平藏へ還し渡す。平藏大に喜び日本の恥辱を雪ぎたりとて、人質四人をば江戸へ上せたり。江戸にて御馳走有て又長崎へおくられ、追て大宛國へ遣すべきとの事なりけり。然處愛子は病死す。翌年せねれる長崎へ來り訛言を申、愛子に逢んといふ。病死の事を告たれば大に悲しむ。手代三人に逢て様子を見、其後江戸へ言上す。江戸より赦免有て、三人の手代引連て歸國す。是より以來おらん人共、おそれて日本の商船を不掠。

## 一、塚田善八郎の事

海警話  
享保二年の頃鳩巢先生海警話の家に、塚田善八郎と云者あり。學問に志深く、六年前より先生に書を學びぬ。文字も器用にて先生氣にも入たり。此者の來由を聞に、物語あるによつて爰に記しぬ。山本源右衛門基庸、或年賀州より武州に

には父子の誠心天鑑も有之ものか 今日おもはざるに、鳩巢先生我許に來りぬ。はやく紹介して謁見せしめんとて、此よし鳩巢へ告げぬ。鳩巢感喜に不絶、急ぎ相見て師弟契約をなす。鳩巢云、弟子を得るには其人の志、又は爲人の様子をも見定て、扱約束も有之事なれども、睿次郎事は基庸計ひの上は、兎角の議に不可及とて杯を賜ふ。父八右衛門云様は、此兒學業も進み、一度經書を執て講釋をも仕程に罷成候はゞ、某一生の望叶申と云もの候。同敷は先生の家へ仕候て、師とも主人とも存知、相勵申様に仕度と云。則基庸相謀ひて、今日より主従の約を結びぬ。世の人僕従を召仕には、請人として二人を以、證據の人と定む。此者には夫に及事に非ずとて、請人なく鳩巢の家へ仕ふ。扱件の杯を返盃すべしとて、終に杯を奉還。其時睿次郎料紙を請て、信濃なる淺間の煙たてかねて室の御山のかげ頼むなりと一首の即事を奉りぬ。其後終に鳩巢の家に至り、鳩巢翁命じて云、聰明睿智は聖人の四徳なり。か様の文字取用るも恐多し。又は俗人の耳を驚す事、則學者の本色に非ず。名を改て然るべし。大學の至善に止ると云は、明德新民の

赴くとて、信州善光寺驛に宿す。亭主塚田八右衛門といふもの物語候。其母懷孕の時分、天より大學を授り候と夢見て候しゆゑ、此子男子ならば必郷里の儒生を招て名をもつけ、以後學問を以身を立候様に可仕と、夫婦申談候。然處終に男兒を得申候。依之大學章句序中の語を以て睿次郎と呼申候。五歳に讀書仕候處、四書小學は覺申候て古文など習候。然ども遠郷の事にて、六經を教候程の師儒もなく候。此上何とぞ江戸へ出し、宜敷儒學に志有之人を師とも頼み、學問させ申度候間、偏に基庸を頼と云。基庸云は、江戸にては誰かあるべき、林家などへ便可然事かと云。八右衛門云は、林家は望所にあらず候。實學の人を頼み申度といふ。然ば我等存候室新助殿と申方、篤學又類なし。是へ倚頼可然かと言て別れぬ。其後數月を経て鳩巢翁、本郷の公邸へ來調ありてかへるさに、基庸が客舎へ來訪あり。基庸大に喜び、俄に蕎麥など物して酒勤めぬ。其時に邸門より善光寺のもの二人、基庸へ逢申度とて來りぬる由、門者より告げぬ。則僕を出して伴ひ來れば塚田父子也。基庸大に驚き、一諾を不違百里を遠とせずして來る志尋常ならず。殊

成就の標的なり。父八左衛門の八文字を受けて、今より善八郎と呼て可也と。卒に善八郎と稱す。四書六經の大意をも有増理會し、去年の冬郷黨の内二三家より招請て、四書講釋をも聞人ありて謝儀など贈れり。鳩巢此事を八右衛門に告げて、父の望も相叶、父有り子ありとて喜び感じ給ひぬ。

一、微妙公水原清左衛門の算勘を被止  
水原清左衛門重保、老年の後知閑と稱す。承應二年の頃京師へ買手役とて、萬づ調へ物の爲に一年在任す。詰期至り交代し歸郷す。此時小將組故、歸郷の後は御供等相勤候管に候へ共、在京の内算用の勘定を勤て在宿す。或時微妙公御尋あるは、清左衛門歸郷仕候得ども、御供にも見え不申候如何と被仰出候に付、右之趣申上候。於在京相司へ引渡候上は、不及勘定候旨にて、即日御書御印之物被下、算用相止御供相勤候。御膳奉行に被仰付相勤候處、御鷹野御辨當御菜は、何時も二菜に不可過との御定にて、其通に仕來候。或時御庭に柚見事に熟し候に付、柚味噲に仕、二菜の外に差副、御行厨へ納遣候。散々御忿被遊、何者申付候やとの御事にて、清左衛門申付候趣申上候。大に御意に不應候に付、